書評

石井敏夫,

『石井敏夫論文集: ベルクソン化の極北』

理想社, 2007.

天野恵美理

0. はじめに

本書は、2005 年に留学先のニースで急逝した、石井敏夫の論文集である。表題作となった遺稿「ベルクソン化の極北」は未完であり、章立ても統一されていない。最後、

［以下未完　遺稿には次のメモが残されていた］

感触。

夢における記憶の問題。(286 頁)

とある。

こうした編集方針は、著者が生きていたことを、また、その生があるとき途絶えたことを克明に語るものであり、評者は身震いを感じざるを得ない。書評をするにあたり、このことを、はじめに述べておく。

1. 全体像、構成

著者である石井氏は、たしかに「ベルクソン研究者」として知られている。しかし、ベ

ルクソンという哲学者にその思索を導かれたところが大いにあるにせよ、本書に収められているのはほかならぬ著者自身の思索である。その射程は、一人の哲学者の研究を超えて、現代を生きるわれわれが抱える諸問題へと広がる。

以下、本書の構成を簡単に見ていこう。まず、Ⅰには、石井氏の思索を導く基本的なモチーフである、「道徳」や「宗教」といったテーマの下に書かれた諸論文、さらに言うなら、それらの内に見いだされる、両義性を論じている諸論文が収められている。続くⅡに収められているのは、Ⅰの思索内容をより実践的な対象へと応用させた諸論文であり、そこでは、環境汚染、ナショナリズム、ボランティアといったことが扱われている。Ⅲに収められているのは、ベルクソンの理論を、その実践が演じられる舞台としての「生命」や「自然」について捉え直そうとした諸論文である。そして、Ⅳには、ラジオの放送講義の原稿と、未完の表題作が収められている。

本書評では、Ⅲから、氏の思索のエッセンスが凝縮されていると思われる「本質と偶然の〈あいだ〉」を、Ⅳから、「ベルクソン化の極北」を、それぞれ取り上げる。

2. 「本質と偶然の〈あいだ〉」について

本論文は、主に、ベルクソンの第二主著『物質と記憶』の知覚理論・記憶理論を下敷きにして書かれているが、本論文の斬新さは、ベルクソンのテキストから、ベルクソン自身は特に概念として体系化することはなかった〈あいだ〉という概念を、さまざまな文脈から引き出して積極的に提唱しているところにある。

はじめに述べられているのは、『物質と記憶』序文に見られる〈あいだ〉である。デカルトが物質界に認められている数学的秩序を「幾何学的延長」と呼び、これをもって物質の本質とみなしたのに対して、バークリーは物質界の数学的秩序を物質界にはいささかのかかわりもないものとして、単なる偶然にすぎないものとみなす。これに対して、ベルクソンは、数学的秩序を、物質界の本質でも偶然でもないもの、いわば本質と偶然の〈あいだ〉に位置づけた。数学的秩序を本質とみなすことを拒否するのは、物質が拡がりをもつ実在でありながら、なお質であることを周到に確保するためであり、偶然とみなすことを拒否するのは、物質が質でありながらも、物理学等において客観的に数学的な仕方で処理できるものであることを常識的に信じているからである。

著者によれば、この〈あいだ〉という考え方は、物質論以外にも、記憶論、持続論、空間論など、ベルクソン哲学の様々な箇所に見受けられる。たとえば、持続論では以下のような具合である。純粋持続が私たちの意識状態が相互浸透する持続であるのに対して、空

間化された持続はその諸要素が相互に分解され、並置される持続であるゆえ、空間性は当然、純粋持続の本質には属さない。それでは、空間化された持続は純粋持続にとっては全くの偶然の産物なのかと言えば、そうではない。自由の主体は、自由行為をなすことそのものにおいてではないにしても、少なくとも自由行為の基盤をなす諸々の調整的行為においては、記号を使用し、社会生活を営む主体なのではないか。よって、ここでは空間性は、純粋持続の本質には属さないにしても、純粋持続が自らを自由行為として顕現させるのに必要不可欠な媒体である、という意味において、本質と偶然の〈あいだ〉にある。

ベルクソンは、彼が本質とみなすものと〈あいだ〉とみなすものとのあいだをすべて埋め尽くしているわけでもないし、どちらかというと本質寄り、あるいは偶然寄り、というような、グラデーションをもつ〈あいだ〉相互の関係をすべて辿り尽くしているわけでもないので、残されている問題は多い。またベルクソンが〈あいだ〉を明瞭に見いだしえていない場合がないかどうか、〈あいだ〉を本質や偶然と取り違えたりしている場合がないかどうかを検討する必要もある。

対象の〈あいだ〉性が十分には見極められていない例として、言語の問題が挙げられる。ベルクソンが言明しているところによれば、言語行為は私たちのもつ諸々の観念のあいだに不連続性を強いるので、諸観念の本質には属さない。とはいえ、著者によれば、諸観念を裁断する不連続性は、大なり小なりの偶然性を孕みながらも、なおいくらかは諸観念によって促されたものであるに違いない。というのも、もしかりに不連続性一般が観念世界一般にとってたんなる偶然にすぎないのであれば、ベルクソンの書き残した言葉の全体が彼の思想の一大偶然事にすぎないことになってしまうのであるから。私たちが読むことのできるベルクソンの作品全体がすでに、ベルクソンの思想の動きの本質と、その動きに全く外的な偶然の、〈あいだ〉に他ならないのである。

こうした複雑で微妙な〈あいだ〉の機能を、まずはベルクソンのテキストのうちで、次いでテキストを越えて、体系的に研究する必要がある、ということが述べられて、本論文は締めくくられる。

3. 「ベルクソン化の極北」について

先にも述べた通り、この原稿は未完であって、私たちに残されているのは第二章の途中までであり、第一章もまた未完である。しかし、遺稿の冒頭に記されてあった章立ての全体がそのまま掲載されているので、この原稿が書かれようとした視点は理解される。この原稿では、第一章から第四章までのそれぞれで、ベルクソンの第一主著から第四主著にお

いて、それぞれベルクソンが掘り当てようとした世界と、ベルクソンが否定しようとした日常的なものの見方を、対比するかたちで書かれようとしている。例えば、第一章、すなわち『意識の直接与件に関する試論』についての章では、日常世界／純粋持続の相の下に観られた世界、というように。

ここでは、『試論』について書かれた第一章を見ていく。『試論』においてベルクソンは、一見したところでは、空間化された時間という観点を徹底的に攻撃しているように思われる。たとえば、「言葉」は、何かを他人や自分自身に表現することで、何かを覆い隠してしまう。言葉は表しつつ、隠す。では、何かとても例外的な幸運に恵まれて、一日一日と日増しに喜びが強くなってゆく状況におかれたとき、「言葉」が覆い隠してしまう本当の姿とは、どのようなものか。著者の引くベルクソンの叙述によれば、それは以下のようなものである。

> その最も低い段階では、内的な喜びは、私たちの意識状態の未来へ向けての方位付けにかなり類似している。次いで、この牽引力によって意識状態の重みが軽減されるかのように、私たちの観念や感覚の継起は速度を増してゆく。私たちは運動するに際して、もはやこれまでほどの努力を傾ける必要がなくなる。そして、最後に、喜びの極限に達すると、私たちの知覚と記憶は、熱や光に比すべきある定義しがたい質を獲得するのだが、この質のあまりの新しさゆえに、ときには私たちは自分自身を顧みて、自分が存在することへの驚きとでもいったものを覚えることがある。(227 頁)

こういう類のことを叙述するベルクソンの文章はとても美しいと、著者は言う。

しかし、ここで著者は注意を促すのである。例えば、上の引用に、「私たちの観念や感覚の継起は速度を増してゆく」というフレーズがあるが、純粋持続の相の下にあるのであれば、速度の増大感一つとっても、人により、また時により、それは違ったものであるだろう。『試論』が私たちを最終的に誘っていくのは、この種の多様性が出現してきてしまう場なのであるから、その地点から見れば、先に引用した文章、詩的言語とて、それが「言語」である限り、それが感じられたその場そのものを「覆い隠す」危険につきまとわれるのである。

『試論』は、観念や動作はそれ自体としてはそれがおかれている文脈に無関係であるとする連合論の議論を徹底的に攻撃しているようにも思われるが、上のように考える著者にとって注目されるのは、むしろ次のような箇所である。

> かりに連合論者が、これとは反対に、これらの心理的状態を、それらが一定の人格においてまとう特殊な色合い―その色合いは、他のすべての状態を反映させているおのおのの状態に到来する―とともにとらえるなら、その際には、当の人格を再構成するために複数の意識事象を連合する必要はまったくない。(242 頁)

著者によれば、このような文章は、ベルクソンが連合論と袂を分かつ地点を表していると同時に、連合論とベルクソンの意外な距離の近さをも表している。この文章は、そのような両義性をもつ。ベルクソンは思ったほどには反連合論的ではなく、連合論は思ったほどには反ベルクソン的ではない。議論の詳細は省くが、当該箇所においてベルクソンと連合論を、双方向から互いに近づけている著者の手つきは鮮やかである。

人には、その人の性情に応じて、味わえる事柄と味わえない事柄とが歴然とある、ということが自然の成り行きであり、また、生きていくのに必要な諸々の事柄は、味わえる、味わえないに関係なく決まってくる面があるのだから、連合論がそこに適用されるような、型通りで自動的に遂行できる行為は、やはり意味を持ち続けるのである。

4. 本書の意義

個々人の素質はあろうが、とかくベルクソンのような哲学者の著作を読んでいると、読みながら自らの内部に起こったこと、起こりつつあることについて、それが深くあればあるほど、もはや他人に対して伝えようとか分からしめたいと思う気持ちが希薄になってしまいがちである。刺激的な読書はしばしば身体的な感覚を伴うものであり、書かれていることがあまりに内的であって、吐き気をもよおすこともあろう。しかし、本論文集に収められた論文は、そのような感覚もまた、思弁的で独り善がりな哲学の悪癖であると笑う。本を読んで吐き気、とか、言葉にならないこの感覚、というようなことを思ったり言えてしまったりもするのは、わたしたちが毎日寝食し、寒いのならば服を着て、また言葉を使い、といった機械的、記号的な世界に依って立った、その上でのことなのである。このことは、当たり前のことではあるが、見落とされがちなこと、あるいは、それは別物、として脇に除けられてしまいがちなことである。そしてひたすら、言葉にならないあれこれについて煩悶する。

ところがそうしたことを、著者はより包括的に、食べたり排泄したりということとのギャップという観点から、〈あいだ〉という一語、それもごく日常的な言葉で表現したのであ

るから、言葉の力に驚くことはもとより、著者の表現能力に敬服せざるをえない。また、著者が指摘した、ベルクソンと常識的態度とのあいださながら、言葉とうごめく思考とが、あるところでは案外近いところにありうるという、意外な距離の近さを思い知ることができ、これは哲学にとってよい兆候だと思われる。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕